(ｳ) 若狭街道の歴史的風致

このように若狭街道では，街道に見られる集落などにおいて祭礼行事や伝統的な農業などが行われており，これらが寺社等の歴史的な建造物や農家などの建造物群，川や山などの自然風景が一体となって，穏やかな街道風景を形成している。

そして，そこを訪れる人々に，京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を地元に伝わる風俗や祭礼などを通して，感じさせている。

ウ　伏見街道

図2-70　伏見街道

伏見街道は，東山区五条を南下して，伏見に通じる街道である。豊臣秀吉が伏見城を築城した文禄年間（１５９２～１５９５）頃，京と伏見を直結する道として開かれたといわれている。沿道には東福寺や伏見稲荷大社，藤森神社など，著名な社寺や景勝地が多く，参詣の道として江戸時代から旅人の往来が絶えなかった。

中でもその代表格なのが，伏見稲荷大社である。伏見稲荷大社は，渡来系の秦氏にゆかりの深い神社で，和銅年間（７０８～７１５）に創建された。この伏見稲荷大社は，全国各地に祀られている稲荷神社の総本社であり，毎年初詣には，全国から沢山の人々が参拝する。本殿（重要文化財），拝殿，権殿のほか摂末社（せつまつしゃ）も多い。山中の神蹟（しんせき）を巡拝するお山巡りの参道の数千本の鳥居は偉観である。

稲荷祭は，平安朝からの伝統で，同社最大の祭典である。５基の神輿が，南区西九条のお旅所に渡御し，還幸祭に京都駅周辺から松原通まで拡がる氏子区域を巡幸して帰社する。この神輿は全国でも優美華麗なものとして知られる。江戸時代初期に書かれた「隔蓂記（かくめいき）」の中では，稲荷祭が華美であるという記載がある。

伏見稲荷大社前の参道は古くから伏見稲荷大社への参詣人のための土産物屋や料理屋などが軒を連ねて門前町を形成していた。寛政１１年（１７９９）発行の「都林泉名勝図会（みやこりんせんみょうしょうずえ）」には，初午（はつうま）のときの門前が描かれ，茶店等の様子やにぎわいの様子が描かれている。現在でも，神具類の店や伏見人形の店を始め，煙とともに醤油タレの焦げた香りが参道に漂う雀の焼き鳥，狐煎餅など，門前町として発展した伝統的な産業が受け継がれている。

伏見人形は，色をつけた素焼きの人形で，１６世紀頃から売られており，伏見稲荷大社参詣の土産物として全国に有名になった。安永９年（１７８０）に発行された「都名所図会（みやこめいしょずえ）」では，門前の店で伏見人形を販売している様子が描かれている。伏見人形は，土人形の起源とされ，全国各地でも模倣されて同様の人形が縁起物として作られ，人気を博している。

写真2-122　伏見稲荷　参道